

『藤村詩集』

私の藤村との出会いは、私と同じ年代の人々がおおむねそうであったように、『藤村詩集』においてであった。中学の上級生のころだったか、高等師範に入ってからだったか、はっきりはおぼえないが、いずれにしても、大正ももう終わりに近くなってからであることはまちがいない。今でも、古本屋の店頭で、あの藤の花房を描いた水色の表紙の詩集を手にしたときの感触を、はっきり思いおこすことができる。『若菜集』『一葉集』『夏草』『落梅集』の四巻合本の初版が出たのは、明治三十七年であるから、私の生まれた年の翌年にあたる。むろん、初版当時のことは知るよしもない。古本屋で求めたとしても、すでに何版か重ねたのちのものであったことは、奥に何行にもわたって出版の年次が記されていたことによっても明らかである。今その本を持っていないので、はっきりしたことはわからないが、伊藤信吉氏が、『現代詩の鑑賞』（上巻）のなかで、氏の手もとにある『藤村詩集』は大正十三年四月刊行のもので、それが第百六十五版である

といっているから、私の本もほぼそれくらいの版のものであったろうか。そうすると、一版に何部刷ったか明らかでないが、かりに千部とすると、初版以来莫大な数にのぼるわけである。大正十三年というと、第一詩集『若菜集』が刊行された明治三十年から数えて、二十七年も経っている。その間藤村詩がどれだけの人々に反響をよんだかは、おおよその見当がつかないでもない。そして、明治三十年代から大正にかけての、日本の青年の精神風土に、藤村詩の与えた影響のきわめて大きかったことが、ある実感をもって想像されるのである。

私が『藤村詩集』という題をかかげたのは、この詩集の影響下に青春期を送った一人として、それにまつわる一つの思い出を語ってみたからである。大正末期に買い求めた本は現在手もとにないと、さっきいったが、この小文は、いきおい、そのなくなった本、というよりも手放した本といった方が正しいが、その本への愛惜を語ることになるだろう。

東京が敵機の空襲にさらされる予想がいよいよ濃厚となってきた昭和十九年三月に、私は家族を郷里に疎開させて、勤務先である学習院の寮の一室に移り、やめ暮らしをはじめた。同じころにわかやもめとなった同僚たちも、それぞれ一室ずつ当てがわれて、相共に馴れない自炊生活を開始したのである。それからというもの、大体初老期前後の男たちが、はじめて家族とはなれたわびしさの反面、学生時代にもう一度帰ったような自由な気分のなかで、妙に昂揚した日々を送っていた。「空襲」の予想が、おたがいの意識の上に、可能の翼を黒々とひろげていた、あの

ころの東京の生活が、今では小説のひとつまかなにかのようにかえりみられるのも、不思議な気がする。

さしむき不用の書籍は、できるだけ家族の荷物と一緒に郷里に送りとどけた。一冊一冊手にとって調べる暇はないので、ごく大ざっぱに選りわけて、手もとに残す分は本棚とともに、与えられた寮の自室に運び込んだ。押入れに並んで造りつけの寝台があり、窓辺に寄せてテーブルをおくと、空所は一メートル四方ぐらいしかのこらなかつた。まずまず、寝室兼書齋兼応接室での生活がこうしてはじめられた。主食の雑炊も、その空所の床の上に引かれたヒーターで作られたのであるから、もう一つ兼炊事場ということもなつたわけだ。

帝都の空襲が日増しにはげしさを加え、児童・生徒をそれから守るための疎開は、政府のつよい勧奨によって、相ついで行なわれていった。私も、新しく中等科に入学してくる生徒をつれて日光へ疎開することにきまり、二十年の三月下旬に東京を離れることになつた。教務課で事務をとっているS嬢が、出発の前日、荷物の整理を手伝いにくてくれた。荷物といっても、書籍は大部分寮にそのまま保存してくれることになつたので、疎開先で授業するのに必要なものと、着がえの若干をとりまとめたにすぎなかつた。この寮もいつ空襲でやられるか知れない。そうなる、ここにおいた書籍も、無事ですむわけにゆくまい。いや、おたがいの命だつて、いづとうなるか知れない。この東京女子大國文科出身の、心の美しいS嬢とだつて、再び会えるかどうか

わからないのだ。「Sさん、ここにある本のなかから、あなたの好きなのを一冊持っていらっしい。」（「形見に……」とはいわなかった）すると、書棚を探していたS嬢が、その一角から『藤村詩集』を抜きとって、「これを頂きます」といって、私に示した。

あとで、隣室のY氏へこのことを話すと、『藤村詩集』を……」といって、さもおかしくてたまらないように、同時にいくぶん憐憫の情をこめたまなざしで私を見つめながら、笑い出した。

その後一カ月も経たないうちに、渋谷のS嬢の家が焼夷弾でやられた。家財道具一切とともに、私の贈った『藤村詩集』も焼けてしまったことはいうまでもない。

哲学者で藤村詩愛好者であった畏友Y氏は、郷里の三重県で、数年前交通事故のため不慮の死を遂げた。S嬢は病弱に堪えて今も同じ学校の教務室に勤務している。

（昭和三十七年十二月）